

学内六報

2013.1.25

no.1434



「新図書館計画」全貌現る

「新図書館計画」全貌現る

濱田総長の行動シナリオを踏まえて策定された大型プロジェクト「新図書館計画」。増え続ける蔵書(全学900万冊強！総合図書館だけでも120万冊！)を合理的に管理し、デジタル化時代に対応すべく検討されてきた、この大計画、構想3年を経て、実現への道筋がようやく見えてきました。今年はいよいよ本格的な工事が開始されます。

この「新図書館計画」は、大学の知を広く俯瞰しつつ高度な教育研究活動を支援するための、21世紀の「アカデミック・コモンズ」創設のプロジェクトと位置づけられます。本郷総合図書館前の広場地下に「新館」を建設、現在の総合図書館(本館)は外観を完全保存したまま内部を全面改修します。「新館」は2017(H29)年度の運用開始、「本館」は2019(H31)年度の工事完了をめざしています。

東大の伝統ある総合図書館の歴史を大切にしながら、新しい時代の研究と学習のための空間を生み出そうという、この「新図書館計画」の推進責任者(新図書館構想 幹事会 Steering Committee 座長)、石田英敬 附属図書館副館長(総合文化研究科 教授)に聞きました。

——濱田総長は就任直後から卓越した研究を行うためのインフラ整備や能動的学習の支援をテーマに挙げていました。新図書館計画が具体化へ動き始めたのですね。

石田 全学の課題、とくに、文系部局に共通の悩みとして、増えつづける蔵書を収容するスペースがないということがありました。例えば、総合図書館の現在の所蔵図書数は120万冊を超えています。全学でもすでに900万冊を超え毎年増え続けています。全学の図書館システムである東京大学附属図書館には、本郷の総合図書館、駒場図書館、柏図書館という三キャンパスの拠点図書館に加えて32の部局図書館・図書室があります。これら全体をいらんで今後どのように膨大な蔵書を管理していったらいいのか、どのようにしたら学生も教員も文献や学術情報に合理的にアクセスできるようになるのかという課題があるのです。そのなかで中心的役割を果たすのが本郷の総合図書館で、今回、ここに300万冊規模の収容が可能な地下自動化書庫をつくることで収蔵能力を飛躍的に増大させ、全学的

な知の基盤を整備しようということです。

——特に文系の研究と教育にとって、図書館は重要な施設ですね。それが大幅に刷新されるということでしょうか。

石田 図書館は文系だけのものという訳ではありませんが、とくに文系の分野の研究と教育にとっては中心的な基盤設備であることはまちがひありません。図書館を現代化して、世界的にも最先端で独創的な学術設備を持つということ、東大全体のこれからの研究と教育の発展にとって極めて重要な未来への投資なのです。幸い、昨年度までに、文科系の部局長を中心にした委員会で構想をまとめ、学内の合意をつくることができました。その中には、例えば、新図書館の本館四階に世界最高水準の「アジア研究図書館」を作ろうという目標も掲げられました。これなどは貴重な蔵書や資料を学内から集中させて、世界中から研究者が集ってくるような高度な研究環境を生みだそうという決意の表れです。

附属図書館副館長
大学院総合文化研究科

石田英敬 教授

に聞く



新館の概要

図書館前広場の地下に学生の研究活動スペースと、日本最大規模の自動化書庫を建設。

本館の概要

歴史的建造物である総合図書館を、建物の外観を保存しながら全面改修し、設備を現代化。

新図書館が目指すもの



1. 電子図書館と伝統的図書館の融合

本館前広場の地下に、約300万冊収容可能な巨大な自動化書庫をつくります(新館)。そのぶん本館では、より多くの本を手にとることが可能なスペースが生み出されます。電子情報と実物の本の間を自由に往き来する「ハイブリッド図書館」が誕生します。

2. 世界最高水準のアジア研究図書館

本館4階には、アジア研究のための第一級の学術資料、貴重な蔵書やコレクションを集中させます。各国の研究者が集う世界最高水準のアジア研究環境をつくります。



新図書館の全体模型図

——新しい図書館は、どのような特徴がありますか？

石田 まず、東京大学の「知へのゲート」になることをめざしています。今年から「新館」の工事が始まりますが、この地下1階には「ライブラリープラザ（仮称）」というラーニングスペースが生まれます。これからの大学図書館には、黙って本を読むだけのスペースだけではなく、研究や学習についていろいろなアドバイスを受けられたり、学生たちが自主的に研究会・読書会を開いたり、プロジェクトやプレゼンの相談をしたり、会話をしたり飲みものもとれる場所が必要です。そのような学生たちの能動的学習のための空間を「ラーニング・コモンズ」と呼びます。いままで総合図書館にはそのような場所がありませんでしたが、まずこれが新館工事で実現します。この設備の運営には、図書館職員だけではなく、教員にも、そして院生たちにもTAなどで積極的に加わってもらいたいと思っています。

この新館の地下二層三層に、300万冊程度を収蔵できる巨大な自動化書庫を作ります。新館は現在の予定では2017年度の運用開始をめざしています。

現在の総合図書館（本館）は、建物の外観と構造はそのまま大切に保存したまま、内部を全面的に改修します。巨大な自動化書庫が新館地下にできることで、本館の書架はすべて原則開架となり、入館者は本を手にとって閲覧することができるようになります。同時に、これからは電子書籍も発達するデジタル化時代ですから蔵書のデジタル化を進めて電子メ

ディア環境を充実させ、図書館が収蔵しているリアルな本とバーチャルな本との間を自由に行き来できるような、最先端の「ハイブリッド図書館」を実現しようと計画しています。いままで出来ていなかった、マルチメディア資料を利用できるスペースや、電子メディア環境を使って研究や学習ができるメディアラボのようなスペースを組み込むことも検討しています。

「本館」の各階は、階が上がるにつれて専門化・高度化するように設計されています。その四階には、さきほど述べました世界最高水準の「アジア研究図書館」をつくり、世界から研究者が集まって研究をおこなう拠点になる予定です。

博士論文の執筆に打ち込めるような場所も必要ですし、新図書館の一部は研究のためには一日中開いているというような体制も将来的には必要になってくるでしょう。

——壮大なプロジェクトですね。

石田 おっしゃるとおり、この「新図書館計画」は、第二期の本館の改修を含めて巨大な事業です。学内外の皆さんのご協力なしには実現できませんし、寄附事業をとおして民間からの支援を広くお願いしているところです。幸いにして卒業生を含む多くの方々からご支援が寄せられ始めています。生まれ変わる東京大学附属図書館について広くご理解いただけるように、今後さまざまな活動を展開していく所存です。皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

ロードマップ（予定含む）



3. 教育との連携と国際化への対応

新館の地下1階に、学生たちの学習や自主的な研究活動をサポートする学びの広場「ライブラリープラザ」をつくります。これは東京大学が推進する、教育の改革や国際化の取り組みと連動しています。

4. 日本の学術文化の世界への発信

上野／本郷地区には、不忍池を囲むように日本の中心的な博物館、美術館、大学が並んでいます。新図書館は、これら近隣の文化施設と緊密に連携して、世界への日本文化の発信の一翼を担います。

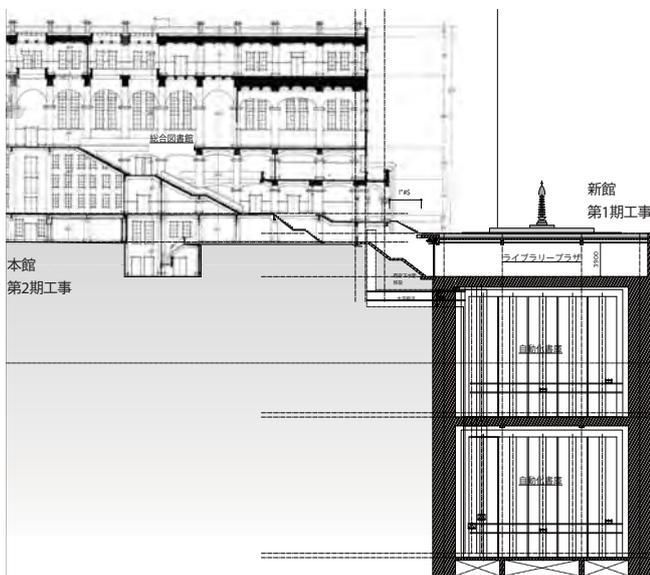
5. 出版文化の公共的基盤

電子メディア時代の現在、活字文化は大きな変化を迎えています。新図書館は、大がかりな電子化を進めると同時に、実物の書籍を確実に管理、活用し、学術の発展に役立てていきます。日本の社会に確かな知を保証する公共的基盤の役割を果たします。

東京大学のすべての書籍、学術情報へのアクセスを可能に

東京大学は、教育と研究のさらなる充実と発展のために、本郷キャンパス総合図書館を大幅に拡充する「新図書館計画」を推進します。

図書館前広場地下に新館を建設し、伝統ある本館は外観を保存したまま内部を全面改修します。



「新図書館計画」の考え方(案)

- 地面に近い場所ほど、開かれた場所とし、知の生産を行うための空間を配置する。
- 地面から離れたフロアになるほど、専門性の高い研究環境を確保する。
- 地下は、全学のための本格的な収蔵・保管機能を担う。

総合図書館の歴史と使命

東京大学総合図書館は、明治10年の開学以来130年余りの歴史を有しています。現在の図書館は、旧建物が関東大震災で全焼し壊滅したのち、ジョン・ロックフェラー Jr.氏の寄附により再建されました。

書物が並んだようだと評された外観や、大階段を中心にした荘厳な内部空間は、内田祥三(のちの第14代東大総長)渾身の設計で、建築史に残る傑作です。震災で焼失した膨大な蔵書は、国内や海外からの寄贈によって補われ、今日まで歴史の試練を超えて発展してきました。今では所蔵図書数は、120万冊に達しています。新しい時代の要請に応え、図書館機能を高度化して広く学内外の人びとに活用してもらうこと、貴重な学術資料を保存し次世代に継承していくことは、総合図書館の大きな使命です。

ご寄附のお願い

石田副館長のインタビューにもありますように、「新図書館計画」は、東京大学の伝統ある建物と蔵書の歴史を尊重しながら、大学の豊かな研究と学習の空間として本郷の総合図書館を新しく生まれ変わらせるための一大事業です。支援を広くお願いいたします。書面でのお振込み、webからのご寄附が可能です。詳しくは、東京大学基金ホームページ(<http://utf.u-tokyo.ac.jp/>)をご覧ください。ホームページの寄附フォームでは、「寄附目的」の項目は「支援プロジェクトを指定する」を、「支援プロジェクト」の項目は「新図書

館『アカデミック・コモンズ』計画」をそれぞれ選択してお申し込み願います。なお、この寄附は東京大学への寄附として扱われ、所得控除などの対象となります。

◇プロジェクト独自の特典

10万円以上ご寄附いただいた個人・法人の方は、総合図書館の銘板にお名前を記して末長く提示いたします。

30万円以上ご寄附いただいた個人の方には、書庫入庫や開架図書の貸出が可能で「総合図書館特別利用証」(3年間有効)を発行いたします。また、300万円以上ご寄附いただいた個人の方には、「総合図書館特別利用証」(終身有効)を発行いたします。

なお、東京大学の教職員・学生等に関しましては、寄附の有無に関わらず、図書館の規定に基づき、総合図書館の利用が可能ですので、「総合図書館特別利用証」の発行はいたしません。

【ご寄附のお問合せ】

東京大学基金事務局 (内線: 21217)

E-mail: kikin@adm.u-tokyo.ac.jp

【事業内容のお問合せ】

附属図書館 (内線: 22615)

E-mail: ac-info@lib.u-tokyo.ac.jp

URL: <http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/contents/ac.html>

取材協力: 附属図書館 制作: 本部広報室

本館: 総合図書館

4F アジア研究図書館

アジア研究の最高の学術資料を揃え、世界のアジア研究をリードする。

3F 閲覧室

総合図書館の特徴である天井高を活用した利用者のための空間。

2F ブラウジング ラウンジ

新聞・雑誌の閲覧など利用率の高いサービスはアクセスの容易な場所へ。

ラーニングスタジオ

活字出版活動にも対応。読むだけでなく、本を生産する場所。

1-3F 中央書架

既存書庫を改修した、光の溢れる新しい中心空間。

1F ゲート

総合図書館の知の体系を一望できるエントランス。寄附者の氏名も掲示。

サービス・事務

一体化された事務スペースにより、運営を強力に推進。自動化書庫とも連動。

メディアラボ

電子メディア技術を駆使し、リアルとバーチャルを総合したハイブリッド図書館の拠点。

B1F 保存書庫

古文書等、貴重書籍も管理できる全学的な収蔵機能を確保。

新館

総合図書館前広場の地下に、日本最大規模の自動化書庫と、学生の自主的な研究や知識の交換を支援する全学スペースを建設します。

B1F

ライブラリープラザ (仮称)

◇グループセッション・スペース
読書会や輪読会、研究プロジェクト会議など、学生が自主的に行う研究会的な活動のためのスペース。
◇イベント・ステージ
研究成果のポスター展示、ブックトークなど、小規模なイベントができる場所。

◇チュータリング・ゾーン

英語での論文作成、研究方法などに関する高度なチュータリングを検討中。

◇ブックフォレスト・エリア

本との新たな出会いを育む、企画展示の書棚エリア。

B2F-B3F

自動化書庫

約300万冊の収蔵力を有する国内最大規模の自動化書庫。



自動化書庫 (柏図書館)

*掲載写真・図はすべてイメージです。

キーワードで読む

Todai Research

放射光 (synchrotron radiation)

サイト内検索

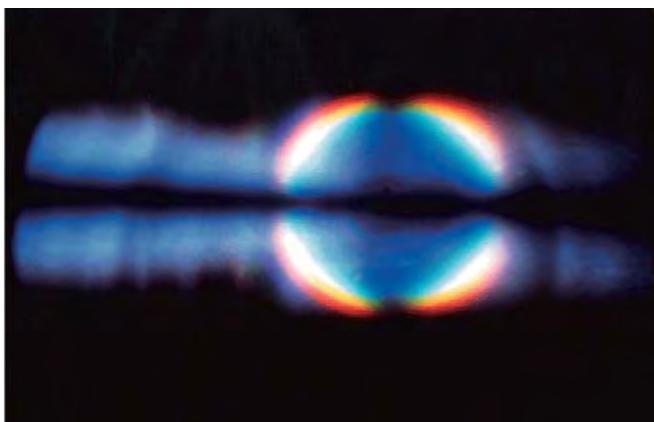


Todai Researchは「東京大学の研究のショーウィンドウ」を目指し、さまざまな分野の研究成果を紹介する公式ウェブサイトです。

ここでは「放射光」をキーワードに、研究者への取材をまとめた特集記事 Feature Storyと最新の論文を解説した Research Highlights の一部を紹介いたします。放射光は、X線から赤外線や紫外線まで、さまざまな波長を持つ光です。これまで知ることができなかった極微の世界を調べられる放射光は、材料科学、生命科学、医学、地球科学、環境科学、エネルギー科学など、幅広い分野の研究で欠かせないものとなっています。

【Feature Story】

極微の闇が輝くとき ～世界最高輝度の放射光が拓く～ 2012/11/21掲載



© ISSP&SRRO

日本には、理化学研究所のSpring8や高エネルギー加速器研究機構のPhoton Factoryなど、数多くの放射光施設があります。放射光施設で発生した放射光はビームラインを通過して実験ステーションに入っていきます。微細なものを見るためには、この放射光を細く絞って輝度の高い光を得ることが最も重要です。

現在、世界最高輝度の放射光を作りだせるのが、Spring8に設置された「東京大学放射光アウトステーション」です。2009年の共用利用開始以来、その測定性能の高さが評価され利用申請が急増しています。

Feature Story「極微の闇が輝くとき」では、東大放射光アウトステーションに凝縮された1960年代に始まる日本の加速器研究の歴史や、世界最高輝度で初めて見ることができたナノスケールの世界について、尾嶋正治放射光連携研究機構長（工学系研究科・教授）にお話を伺いました。

続きはTodai Researchウェブサイトでご覧いただけます。

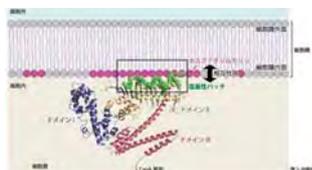
<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/todai-research/feature-stories/seeing-the-unseen/>

【Research Highlights】

「放射光」や「X線」などのキーワードで検索してみてください。

ピロリ菌が送り込む「尻尾のある刺客」 ～胃がん発症メカニズムがCagAタンパク質の構造から判明～

2013/01/07掲載



© Hatakeyama Lab.

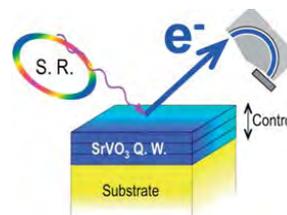
胃がんは、全世界の部位別がん死亡の第二位です。ピロリ菌が私達の体に送り込むCagAタンパク質は、胃がんの原因として知られています。今回、X線結晶構造解析と核磁気共鳴法を用いて解明されたCagAの構造から、このタンパク質の巧妙な戦略が初めて明らかになりました。

<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/todai-research/research-highlights/the-assassin-with-a-tail/>

きままな天才児を手なずける

～世界で初めて強相関電子を2次元空間に閉じ込めることに成功～

2011/10/12掲載



©2011 Hiroshi Kumigashira

きままな天才児とは、電子同士が互いに強く影響する状態にある「強相関電子」のこと。高温超伝導や光触媒などの驚くべき特性を示す一方で、制御が困難だった強相関電子をコントロールすることに成功し、新しいエレクトロニクス之道が開かれました。ここでも、放射光を用いた「見る」技術が重要でした。

<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/todai-research/research-highlights/corraling-electrons-in-2d/>

ご意見・問い合わせはこちらまで

Mail: kouhoukikaku@mail.u-tokyo.ac.jp Ext: 21045 (Todai Research編集部)

東大ポータル >> 便利帳 >> 総合企画部 >> 広報課 <http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/todai-research/>



プロジェクトで復興を支援する 再生のアカデミズム

【実践編】

第9回

プロジェクト名

陸前高田市消防団員および消防署員への震災後のサポート

東日本大震災では、地元の消防団員の方が身体を張って対応しました。最後まで危険地域で避難を呼びかけ対応する中で、多くの団員が大津波に飲み込まれました。震災により全国で254人の消防団員が亡くなったといえます。目の前で仲間が流され、かなりの数のご遺体運んだ消防団員らの心の痛手はどんなに大きいことでしょう。陸前高田市の消防団員等のこのころのケアに従事されている川上憲人教授（医学系研究科）にお話を伺いました。

広報課 2012年5月から活動を開始されたのですか？

川上 支援者（被災地で支援活動に従事する方々：消防団員、役所の人、看護師等）は、震災直後は責任感を持って緊張して支援活動を行っていますが、事態が多少落ち着く1年後くらいからこのころの問題が顕在化してきます。その頃になると、仮設住宅に住み続けているかどうか、家族が一緒かどうか、経済的余裕があるか等による格差が広がってきて、そのことによって、人によっては大きな問題を抱えている場合もあります。ですので、支援者へのこのころのケアは、震災後1～2年くらいが非常に重要になってきます。今回の活動のきっかけは、県立大船渡病院の救命救急センターから「消防団710名のこのころのケアができていない。サポートしてくれないか」との個人的なつながりでの依頼でした。最初は何かできるのかよく分かりませんが、消防団長の大坂さんと話をした際に、「団員に何もしてやれていない。彼らは我慢強くても何も語らないけど、きっと悩みを抱えている団員もいるはず。よろしく願います」と頭を下げられ、心を動かされました。今回は、最初から研究を外して現地に入ることにしました。

広報課 具体的にはどんな活動をされた

のですか？

川上 まず、5月から準備をして、希望者を募って面談をする「健康相談（いちねんけんしん）」を6月～8月にかけて行いました。それから、7、8月に「健康教室」を開催しました。相談件数は15件でした。相談にいらした方は、消防団員としての過酷な体験を引きずっているというよりは、住居の問題、家族の関係、借金など個別の問題を抱えておいでになるという印象でした。一方で、団員としての大変なお仕事にねぎらいの声をかけると、「はじめてそんな言葉をもらった」と感謝されることもありました。アンケートでは「親身になって熱心に聞いてくれたので安心して話すことができ、楽になったような気がする」と言った声がいくつかありました。団員、被災者同士では話づらいことが相談員に話せた、ということが一番の効果だったと思います。健康教室では、ストレスについての簡単な講義やグループワークの他に、ヨガやストレッチなどを行いました。身体を動かす活動を加えたことは大変好評でした。活動を始める前に、大坂さんに「何をしたらいいですか？」と率直に聞きました。そうしたら、団長から明確な答えを頂きましたので、それらをプログラムに反映しました。復興の支援活動は、現地の方が求めるものを提供することが一番大事だと思います。

また、今回の活動のきっかけは個人のつながりでしたが、いよいよスタートするという時になって、県や市の関係者との調整が生じ、予想外に苦労しました。でも、徹底的に話し合った結果、皆で分かりあい、結果的によい形で進めることができました。現地に入るには、こうした調整ごとにエネルギーを注ぐ必要があります。そこを怠っては、独りよがりの活動になってしまうかもしれません。

広報課 今後の予定をお聞かせください。

川上 11月には陸前高田市の消防署からの依頼で、署員全員の健康相談を行い

東日本大震災、それに伴う原発事故という未曾有の大災害の発生以降、東京大学では様々な形で復興支援を行っています。また、総長メッセージ「生きるともに」に表されているように、先の長い復興に向けて、東大は被災地に寄り添って活動を行っていく覚悟でいます。この連載では、救援・復興支援室に登録されているプロジェクトの中から、復興に向けて持続的・精力的に展開している活動の様子を順次紹介していきます。

ました。震災から2年、個々人が心の整理をして次へ進む時期ですので、今後も先方と相談しながら引き続き消防団員らのこのころのケアサポートを行っていく予定です。

こうした支援者側のケアについては実践例もまだまだ多くなく、今回の活動がモデルになる可能性もあると思っています。被災地のマンパワーは十分ではなく、現地でこうした活動をどのように展開するのが大きな課題です。「健康相談」には病気かどうかのアセスメントの面もあるので専門家が必要ですが、話を聞くということはある程度トレーニングを受けた人であればできるでしょう。ボランティア組織等との連携も可能性があると思っています。



健康教室でのグループワークの様子



健康教室でヨガを行う様子。「みんなで楽しくしゃべったり運動したり、なかなか普段出来ないことをやれてよかった」といった声も

プロジェクトに関する問い合わせ

大学院医学系研究科 教授 川上憲人
kawakami@m.u-tokyo.ac.jp

構成：本部広報課（内線：82032）



決算のDOOR

数字が語る東京大学

第27回

分解したらどうなる？

「分解」＝複数から構成されている要素を2以上の要素に分けること。有機物分解、電気分解、因数分解、空中分解（はちょっと違うかも）…、生態系や化学、数学の世界でもおなじみの「分解」は会計の世界にもあります。例えば複数の事業を営んでいる企業の場合、合算された財務諸表の数値だけではその企業の実態を知るには不十分。そこで財務諸表の費用や収益、資産その他の財務情報を「セグメント」と呼ぶ事業区分で分解、併せて公表しているのです。

「愛は食卓にある」がキャッチフレーズで、マヨネーズが国内首位の某食品メーカーでは「調味料・加工食品事業」「健康機能事業」「タマゴ事業」「サラダ・惣菜事業」「共通事業」「物流システム事業」の6つがセグメント。全体の営業利益では前年より26億円増加（H24.11.30時点）していますが、分解された財務情報では、「健康機能事業」だけ3億円の減益です。原因はヒアルロンの販売不振でコスト削減が必要と説明されています。このようにセグメント情報は、益々多角化する企業の業績や将来の予測を、経営者と同じ目線で理解できる一つのツールであり、企業の規模が大きければ大きいほど使えるツールとなるのです。

それは国立大学法人も同じ。東京大学では「大学」「附属病院」「附属学校」の3つのセグメントで、財務諸表の業務費用、業務収益、業務損益、帰属資産を分解し、公表しています。「大学」「附属病院」「附属学校」それぞれに使命や目的、主体業務があるからです。ただしこれまで説明してきたように、大学は企業と違い、財務諸表の数値だけでは使い道やその財源はわかっても、実績までは測れません。そこで財務諸表と同時に公表する実績報告書と合わせて見ていただくことで、セグメントごとに事業の実施状況や今後の方向性など、大学の経営者＝総長目線で東京大学を俯瞰、理解を深めていただいています。「株主・投資家・債権者…」と「納税者・学生・企業・寄附者…」、企業と国立大学法人では財務諸表の利用者は違っても、財務情報を分解する目的や効果は一緒なのです。

微生物による有機物の分解は養分を作るため、因数分解は複雑な方程式を解くため、そして財務情報の分解は企業や法人をさらに深く理解するため…「分解」はどの世界でも重要な役割を担っているのですね。（青）

本部財務部決算課（内線22126）

E-mail: kessanka@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト 第83回

RELAY COLUMN

農学系教務課学生支援チーム 主任 大原 佳園子

みんなのやる気を応援したい



緊張感あふれるデスク

アメとムチでいえばムチ役でしょうか。大学院学生の教務担当として、学生を入学させて、履修させて、修了させる仕事をしています。個性あふれる学生達、そして個性あふれる先生方を相手に日々奮闘中です。「まだ新人だから～」なんて言っていた頃から早4年。各方面から矢が飛んできそうですが、学生たちのお母さんにはまだ早いけど、お姉さんはおこがましいかなと思う今日この頃です。最近「大学院生になったら海外に行きたいんです！」という力強い問い合わせも増えてきました。ゼヒがんばってほしいですね。業務ではよくUT-mateやワード、エクセルとにらめっこしています。なんとかして手をぬ…、いえ効率的にかつ間違いのないよう、そして真心こめて仕事をするのが使命です。タフな東大生のために！プライベートでは10歳の男の子の母親です。ガラスの十代になる手前、なるべくうざがられないようにベタベタする方策を日々思案しています。



Ladies team for NOGAKU

得意ワザ：留学生の名前でなんとなく出身国がわかります（特にアジア）

自分の性格：石橋を叩いて、叩いて割るか、叩かないで渡らない
次回執筆者のご指名：森本温子氏

次回執筆者との関係：だいぶ年下ですが頼りになる先輩です☆
次回執筆者の紹介：明るくいつも助けてくれるおひさまのような人です

Policy + alt

政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心にお届けします。



政策ビジョン研究センター

第40回

秋山 昌範 政策ビジョン研究センター教授

在宅高齢者のケア —ビッグデータの活用が鍵—

日本がいま突入しつつある超高齢社会とは、複数の疾患を持つ高齢者が増えてくる社会だ。複数の疾患に対応するため医療も大きく変わり、また近年の医療法や介護保険法の改正に伴って、長期入院治療から在宅医療・在宅介護へシフトしようとしている。

そこで、在宅高齢者の生活行動を記録し、情報を蓄積・活用するためにスマートフォン等を使った見守りサービスや、各種センサーを活用する住宅設備も含むケアが構築されつつある。ただこれらの仕組み等を構築しただけでは不十分だ。蓄積されたビッグデータを活用することがこうした仕組みを生かす鍵になる。

我々は、高齢化に関わる問題とその解決法を、最新のマーケティング理論を用いて研究している。そのポイントの一つは、国民の安心・安全の確保に寄与するということだ。ただ低成長社会を迎えて従来型の行政の限界も明らかになってきた。行政の効率を上げるためには、行政におけるIT化を進め、大量データ（エビデンス）の収集・分析・解析、自然言語処理やネットワーク分析によるテキストマイニングを通じて選択肢を提示することが必要だ。パターン化された事案における決定の自動化実現が期待されるからである。このような手法が、医療政策の決定過程にも応用できるかも研究中である。

詳細は当センターウェブサイトをご覧ください。

<http://pari.u-tokyo.ac.jp>



高齢者の生活行動に関する情報をどう記録し、ケアに生かすかが問われている

<http://pari.u-tokyo.ac.jp>

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第86回

SanRen対談 「企業に聞く産学連携への想い」vol.1

今回のSanRen対談では、ともに社会的課題解決へ向けたイノベーション創出を目指す仲間である、産学連携研究推進部の増位庄一郎長代理と、横河電機株式会社イノベーション本部産学官連携・標準化戦略室の高木真人室長による対談を3回連続で掲載します。

増位 大学の研究成果を広く“社会実装”させていく重要性が強く認識され始めています。大学の知を社会に還元していくためには、産業界とのより良い、かつ緊密なパートナーシップが欠かせません。

高木 企業側でも、企業価値の向上や研究開発の効率化、スピードアップが求められ、オープンイノベーションを企業戦略に組み入れる必要性が高まっています。技術者の意識改革と企業風土の変革が大切で、弊社の経営トップからも、「自分たちだけでできる時代は終わった。外部との連携をもっと強化しなければいけない」と言われています。このため、弊社の技術ニーズを満たすシーズを募集する活動を積極的に始めています。当室発足以来、重点的に7つの大学の産学連携本部との交流を進めていますが、その中でも、東大独自の産学連携スキームである「Proprius21」は大変優れたシステムだと思います。技術シーズ発掘だけでなく、技術経営に関するテーマの解決も期待します。

増位 「Proprius21」は企業のニーズに合致する「適切な研究テーマ」と「最適な本学研究者」を企業の方々と産学連携本部のプログラムオフィサーがタッグを組んで組織的に探索する有償のプログラムです。

高木 従来弊社では、懇意の大学研究者に共同研究をお願いすることが多かったのですが、当室ではより組織的かつ戦略的な連携を推進するための仕組み作りを進めています。「Proprius21」のスキームはこの要求に適したものになっていると思います。



対談をする増位部長代理(左)と高木室長(右)

全文はコチラ! <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/jp/information/crossroad/index.html>

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・第66回 バイブル

総合文化研究科 教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

長谷川 寿一

「合コン型」サイエンスカフェ

7、8年前にはほとんど馴染みのなかったサイエンスカフェであるが、昨今では認知度も高まり、JSTのSciencePotalサイトでは、各地のサイエンスカフェ情報が刻々と更新されている。個人的には日本学術会議の科学力増進分科会委員として、その導入と促進に関わってきたこともあり、嬉しい限りである。

自分自身も年に何度かサイエンスカフェで話題提供あるいはファシリテータを務め、運営のコツも少しは分かってきたように思う。カフェに関わった当初から、参加者との双方向コミュニケーションを促すには、話題提供者が一方的に独りよがりではしゃべってはいけない、できればPowerPointの利用も最小限、ファシリテータの役割が大切、などと説いてきた。が、結局のところ、参加者の満足度は、参加者がどれほど主体的に関われるか、会場の一体感を共有できるかにかかっているように思う。

ここ数年、私が企画するカフェでは、話題提供者の数を増やし（4～8名、平均6名程度）、話題提供の時間は短く（10分以内）、質疑応答セッションは話題提供者が参加者の中に入り込む、あるいは話題提供者が相互にファシリテータ役を演じるという形で進めている。命名が適切かどうか自信がないが、合コン型カフェと呼ぶことにしよう。典型的には、自己紹介を兼ねて話題提供者が研究紹介をした後、研究者が参加者の中に散らばって意見交換、そして最後に会場全体でまとめの議論というスタイルである。

研究者は、所詮役者でも芸人でもないのだから、一人で座を持たせるの難しいが、仲間と共に一座形式であれば、参加者との掛け合いもごく自然に進む。バンドのノリである。動物行動学会主催で行った「動物行動いろいろ、研究者いろいろ」と題するカフェでは、動物行動の多様性ととも、研究スタイル、研究者生活の違い、と同時に通底する共通点、が浮き彫りになった。

参加者の側からすれば、いろいろな話が聞けて研究分野の広がりがわかり、研究者との距離感が近いので発言もしやすいという利点がある。話題提供する研究者同士でも絆が深まり、打ち上げのビールも美味しい。どうぞ一度、試してみてください。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpret.c.u-tokyo.ac.jp/>

救援・復興支援室 より

第20回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(12～2月)

12月18日	東日本大震災に関する手記をウェブサイトに掲載開始
12月25日～ 1月11日	岩手県陸前高田市の学習支援ボランティア 活動場所：陸前高田市「学びの部屋」
1月19日～ 3月3日	福島県相馬市の学習支援ボランティア 活動場所：相馬市内の応急仮設住宅集会所
2月12日～ 3月1日	岩手県陸前高田市の学習支援ボランティア 活動場所：陸前高田市「学びの部屋」
2月20日	第17回救援・復興支援室会議

遠野分室ものがたり

本部企画課係長(遠野分室勤務)

文：赤崎 公一

「また来てね！」

陸前高田市教育委員会等が主催する『学びの部屋』。本学が学習支援ボランティアとして参加して、ちょうど1年が経過しました。

『学びの部屋』とは、仮設住宅では机を置くスペースも勉強する環境も乏しい為、放課後や休日に子供達が安心して過ごせるサンマ（空間・時間・仲間）を小・中学校を開放して提供する事業で、東京大学も学習支援を通じて子供達の未来を創るお手伝いをさせて頂いています。本学からは現在までに延べ160名以上の学生が参加しました。

これから受験シーズンとなり、更に『学びの部屋』のニーズが高まる事から、主催者からは今後の継続的な参加やボランティア学生の増員、東大企画の提案といった要望等があり、本学への期待を強く感じました。

「次はいつ来るの？」東大生が来る日を楽しみにしている生徒もおり、これは1年間継続的に参加させて頂いた事で、主催者・参加生徒との信頼関係が築けた証ではないでしょうか。

どんどはれ・・・



米崎小での学習支援の様子

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html

Email : kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

内線：21750（本部企画課）

トピックス一覧

今号から、このページでは東大ホームページの「Topics」(URL : http://www.u-tokyo.ac.jp/public/archive_j.html) に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとして簡単にご紹介します。今後ホームページの登録システムの改修を行い、各部局のトピックスも投稿いただく予定です。

日付	担当部署	タイトル	URL
2012年10月31日	本部外部資金課	平成24年度「科研費」審査委員の7名表彰される	http://www.u-tokyo.ac.jp/public/archive2012_j.html#346
2012年12月8日	産学連携本部	「University Venture Grand Prix 2012」開催	http://www.u-tokyo.ac.jp/public/archive2012_j.html#347
2012年12月14日	生産技術研究所	本部棟1階展示	http://www.u-tokyo.ac.jp/public/archive2012_j.html#349
2012年12月19日	大学院経済学研究科・経済学部	カルロス・ゴーン氏、グローバルリーダーを語る	http://www.u-tokyo.ac.jp/public/archive_j.html#350
2012年12月21日	医学部附属病院、 大学院農学生命科学研究科・農学部	バングラデシュの内臓型リーシュマニア症研究拠点の設立に協力	http://www.u-tokyo.ac.jp/public/archive2012_j.html#348
2012年12月21日	本部総務課	2012年度業務改革総長賞表彰式の開催	http://www.u-tokyo.ac.jp/public/archive_j.html#351
2013年1月1日	本部人事給与課	人事異動(教員)	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動(教員)
2013年1月1日		退職教員の最終講義(2月開催分)	http://www.u-tokyo.ac.jp/news/detail_j.html?id=14999



CLOSE UP

2012年度業務改革総長賞表彰式の開催(本部総務課)



総長から表彰状を受け取る受賞者



受賞者によるプレゼンテーションの様子



受賞者一同。総長を囲んで記念撮影

2012年12月21日(金)、安田講堂において、2012年度業務改革総長賞表彰式が開催されました。

表彰式では、業務改革推進室が全教職員を対象に募集した多くの業務改革提案課題等のうち、厳正な審査の結果選出された総長賞1件、理事賞3件、特別賞2件に対し、濱田総長及び磯田理事から表彰状並びに副賞が授与されました。引き続き、濱田総長から、今後も全学的な連携をとりながら改革をすすめる必要がある旨、教職員へのメッセージがありました。

当日は約350名の教職員が参加し、表彰式をともに祝い、そのアイデアを共有しました。本年度の受賞課題については以下のとおりです。

○総長賞

「柏地区における事務業務の整理・再構築と教職員向け事務手続きサイトの開設」
柏地区共通事務センター業務改革WG
(代表者：千葉 栄夫)

○理事賞

「液体ヘリウム使用料金精算業務フローの改善—料金計算の自動化・会計処理の効率化・複数経費への対応—」

低温センター寒剤供給・会計業務改善ワーキンググループ(代表者：戸田 亮)

「外国人研究者と受入担当者のための情報整備—外国人研究者ハンドブック、受入担当者マニュアル、本郷エリアマップおよびHPの作成—」
理学系研究科国際化戦略室(※取り組み当時名称)
(代表者：川村 真理)

「志願者住所の電子データ化による出願書類数の削減と、それによる志願者サービスの向上及び入試事務の効率化」
教育・学生支援部入試課(代表者：山崎 泰生)

○特別賞

「東京大学OPACへの駒場図書館書架ナビ機能の追加」

駒場図書館業務改善プロジェクト
(代表者：茂出木 理子)

「エックス線装置の安全管理の合理化の実現」
環境安全本部放射線管理部
(代表者：小橋 浅哉)

※以下URLにて、プレゼンテーション資料をご覧いただけます。(※学内限定)

業務改革総長賞受賞課題の一覧：
<http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/業務改革総長賞受賞課題の一覧>

 CLOSE UP

**カルロス・ゴーン氏、グローバルリーダーを語る
(大学院経済学研究科・経済学部)**



カルロス・ゴーン氏

2012年12月19日(水) 赤門総合研究棟第6教室において、ルノー・日産アライアンスの会長兼最高経営責任者であるカルロス・ゴーン氏の講演会が開催されました。

講演会は、最初に経済学研究科 藤本隆宏教授が登壇した以外、本学学生が主体となり進められました。ゴーン氏は、自らの体験をもとにグローバルに通用するリーダーの資質について熱く語り、グローバルリーダーになるために必要な3つの資質として、知的好奇心、他の文

化背景を持つ人を受け入れる謙虚さ、そして一般常識を持つことを指摘されました。その後のパネルディスカッションでは、工学系研究科、公共政策大学院、経済学研究科から選出された学生パネリストが、自らの意見をゴーン氏にぶつけ、ゴーン氏がそれに答えるという形で進行し、活発な議論が行われました。

1時間半という時間は瞬く間に過ぎ、ゴーン氏による白熱した講演会は大盛況のうちに終了しました。(詳細は左の表のURLを参照)

表紙写真「ガラガラヘビの頭骨」



写真提供：大学院医学系研究科 犬塚則久

あけましておめでとうございます。本年は巳年なので表紙写真は一見ヘビには見えないヘビの頭骨を掲載しました。以下、写真を提供いただいた犬塚先生の解説です。

ヘビは細長い体をした肉食性爬虫類である。小さい頭で何倍もの大きな獲物を丸呑みするため独特な形に進化した。まず上下顎の長軸が一直線になるほど開ける2段式の顎関節である。

左右の下顎骨は正中で結合せず、弾力に富む長い靭帯で結ばれている。獲物をくわえたまま左右の顎を交互に後にずらすことで少しずつ呑み込んでいく。歯は口を開けたまま獲物を引っ掛けて逃がさないため鋭く、強く後に傾く。ガラガラヘビのような毒蛇では前端にある大型の毒牙が管状となり、注射針のように確実に毒を注入できる。

総長年頭挨拶



総長
濱田 純一

新年あけましておめでとうございます。

昨年、これまでになく大学の動きが社会の耳目を集め、様々な議論や報道がなされた年でした。グローバル化の急速な進行と相俟って、日本の社会・経済の将来に対する危機感が高まり、自信を持った日本の再生に向けて、またそうした将来を担う若者の育成について、社会が大学に大きな期待を寄せていることの表れと受け止めています。

国民によって支えられている東京大学は、このような社会の期待に、速やかに具体的な形で応えていく大きな責任があります。

私は総長就任以来、国際的な競争力を備えた卓越性を追求する研究のための環境整備を人事財務施設等諸方面で進めるとともに、人材の育成について、「よりグローバルによりタフに」というコンセプトを軸に取り組みを行ってきました。昨年は、学事暦の見直しをはじめとして「総合的な教育改革」を進めていく方針を改めて明確にし、教育制度の枠組み、教育の質向上、入試制度など、多様な事項について学内での議論を幅広く行い、その成果を逐次具体的な形へとまとめることを目指してきました。本年も、その歩みを着実に、かつスピード感を持って進めていく所存です。

震災からの再生も日本の大きな課題です。震災から2年が経とうとしていますが、本格的な復興への動きはまだまだこれからです。東京大学は、「救援・復興支援など日本再生に向けた活動の展開」を、2015年を目標とした計画である「東京大学の行動シナリオ (FOREST2015)」の重点項目の

一つに加えました。被災地や関係各所との絆を大切にしながら、大学らしい専門分野を活かした支援や学生・教職員のボランティア活動といった形で、復興支援のための活動を息長く継続していきます。

今年は私の6年の任期の5年目に当たり、「行動シナリオ」に掲げた目標を実現していく上で極めて重要な年となります。これまでに着手した様々な取り組みを踏まえながら、研究力と教育力のさらなる向上を通じて、明日の日本社会を力強く支え、明日の時代に生きる若者を育てるために、いまいっそうの力を注ぎたいと考えています。皆様からのさらなるご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。

皆様のこの一年のご多幸を、心よりお祈り申し上げます。

〈平成25年1月1日 東大ホームページに掲載〉



最終講義のすすめ

私は、有機化学という炭素を主たる元素として用いるのであればなにを対象にしてもよいという懐の広い分野で研究に携わっています。このような自由意思に任された科学の基礎研究を、どのように現在や未来への意義のあるものにするかに、しばしば思いを馳せませす。研究室以外でも、絵画の展覧会などに、「・・・と同時代の画家たち」のようなタイトルがついているときには、特に考えさせられます。「と」の前になるか後になるかというのは画家(あるいは科学者)にとっては違いがあります。実際の展覧会で、前者の作品により輝きがあるように見えるのは、タイトルの影響も大いにあるかもしれませんが、前者には時代を超えた作品の伝播力があるということなのでしょう。

伝播力のある基礎研究は、独創性と生産性の双方に支えられていることが多いようです。一般的には、独創性は特別な人物があるコツを用いると突然得られるもののように思われている傾向があります。しかしながら、私が学んできた実験科学に属する多くの科学者は、生産された予想された成果と予想されなかつ

た成果を、ビジョンを持って未来方向に組み合わせた結果、他の誰にもない独創性に至っているようです。走りながら思考した人生そのものが独創性につながっていると言い換えることが出来るかもしれません。

新年を迎え、卒業のための論文準備などにあわただしいシーズンになっています。すぐにやってくる年度の終わりには、いままで研究室で活躍してきた大学院生は卒業し、いままでお世話になった先生方は退任を迎えられます。退任される先生方のキャリアを総括してお話ししていただく機会として、最終講義が準備されています。最先端の研究を担っている先生方が、どのような過程を経て現在に至ったかを知るためには、最終講義以上の貴重な機会はないように思います。独創性について考えている大学院生は是非、この機会を利用して、先生方の方法をご自分のキャリア設計に応用されることをお勧めいたします。

井上将行
(大学院薬学系研究科・薬学部)